論文

南フランス・イエールの中世キリスト教聖堂

中川　久嗣*

はじめに

南フランスのイエール（Hyères）は、プロヴァンス地方最南端に位置する人口約 55,000 の中規模都市である。この街に多く植えられているヤシの木にちなんで、いかにも南国風の「イエール=レ=パルミエ」（Hyères-les-Palmiers）と呼ばれることも多い。行政的にはプロヴァンス=アルプ=コート・ダジュール地域圏（通称《PACA》）の中にあって、ヴァール県（Département du Var）のイエール=エスト小郡庁所在都市である（ヴァール県の県庁所在地はトゥーロンである）。近代以降、特に 19 世紀に鉄道が開通して以降は、地中海岸にあって温暖で風光明媚なリゾート地として脚光を浴びるようになり、ニースやカンヌなどと共にコート・ダジュールの一角を占めるようになった（コート・ダジュールの西端はトゥーロンとされている）。実際イエールには数多くの著名人がやって来た。ミシュレ、トルストイ、ロバート・ルイス・スティーヴンソンなど、挙げればきりがないが、中でも最も有名なのはイギリスのヴィクトリア女王の例であろう。しばしばフランスのコート・ダジュールなどにやって来た彼女は、1892 年の 3 月から 4 月まで、家族や多くの従者たちを引き連れてイエールのコストベル地区にあった「グランドホテル・アルビオン」（Grand Hôtel d'Albion. 現存せず）に滞在した[1]。それ以来、今日でも多くの観光客を集めるイエールであるが、その歴史に関しては一般には（特にわが国では）あまり知られていない。本稿では、このイエールの歴史をたどるとともに、この街にある 12 世紀のロマネスク期以降の中世キリスト教聖堂について、それぞれ現地調査（2016 年 3 月に実施）を踏まえた考察を交えながら見てゆきたい。ヴァール県のイエールは、Victor Lassalle がかつて古代ローマ建築の強い影響を受けた「プロヴァンス・ロマネスク建築固有の領域」としたエリアの外側にはずれていて、古代建築におけるいわば一種の「no man's land monumental」にも位置する[2]。しかし文化的には決して不毛な土地ではなかったし、中世以来、いくつものキリスト教聖堂が建設され、それらは長い歴史を通して人々の祈りの場となってきた。イエールは単なるリゾートの街なのではなく、千年の時をへて積み重ねられた豊かな文化の場でもあるのである。

* 東海大学文学部ヨーロッパ文明学科

１．歴史的背景

イエールが本格的に歴史の舞台に登場するのは中世も 10 世紀以降のことであるが、現在のイエール市街から南へ約 5 キロ、ジアン半島の付け根のすぐ西側にあたる海岸沿いの場所に、すでに紀元前 4 世紀前半頃にはマッサリア（現在のマルセイユ）がギリシア人の植民拠点オルビア（Olbia）を築いていた。オルビアは後述するように、マッサリアとイタリア方面を結ぶ海上交易の中継地点であり、かつその海上交易ルートを防御する役割をも果たしていた。

現在のヴァール県にあたる地域はその後、海岸地方から内陸部にかけて定住していた土着のケルト系リグリア人を征服したローマによって、北イタリアからニカエア（ニース）やフォールム・ユリイ（フレジュス）をへて属州ガリア・ナルボネンシスへと通ずるアウレリア街道（Via Aurelia）が整備されるなどして、イタリアとプロヴィンキア（プロヴァンス）、そしてさらに西の属州アキタニアやイベリア半島との間の交通を結ぶ役割を果たすようになった。西ローマ帝国滅亡後は、東ゴートや西ゴートといったゲルマン諸国のつかの間の支配をへてフランク王国の統治下に入るものの、シャルルマーニュの死後は王国の分割ののち、ブルグント王国の一員を構成した。ブルグント王を上級統治者として、この地方の実質的な支配権を行使したのは、プロヴァンス伯（あるいはアルル伯）である。10 世紀初め、もとはカロリング家に連なる貴族であるボゾン家から出たウーゴ（ユーグ／Hugues d'Arles）がプロヴァンス公となった。このウーゴの系統が、10 世紀から 11 世紀初めにかけて伯（comte）としてプロヴァンス地域の実効支配を続けた[3]。

プロヴァンスから北イタリア沿岸地域は、およそ 8 世紀から 10 世紀にかけて、地中海の制海権を事実上掌握していたイスラーム勢力によって、たび重なる侵略と略奪を受けた。732 年の有名なトゥール・ポワティエの戦いの後も、イスラーム勢力が 9 世紀に築いた南フランスにおける軍事的拠点が、サン=トロペ東方の山中のフラクシネートゥム（Fraxinetum／現在の La Garde-Freinet）であった。彼らはそこから周辺地域への略奪行為を続け、しばしば遠くアルプス地方にまで足を延ばした[4]。972 年にはクリュニー修道院長マイウール（Maïeul／Mayeul）が、イスラームの軍勢に襲撃され囚われの身となるという事件が起きたことなどを受けて、翌 973 年（あるいは 974 年）、当時のアルル伯兼プロヴァンス伯であったギヨーム 1 世（Guillaume Ier de Provence）が、兄のルボー1 世（同じくプロヴァンス伯を名乗っていた）や周辺諸侯と協力してフラクシネートゥムを攻略し、その結果、南フランスからイスラム勢力を一掃することに成功した。ギヨーム 1 世はこのことにより「解放者」（le Libérateur）とも呼ばれる[5]。

イエールの名前が歴史の舞台に登場するのは、ちょうどこの頃のことである。それまでイスラーム勢力が押さえていたフラクシネートゥムとその周辺（すなわちプロヴァンスの地中海沿岸地域）が文字通り「解放」されたことで、プロヴァンス伯やその協力者である諸侯による、この地域のいわば「再分割・再分配」が行われることとなった。プロヴァンス伯ギヨ

ームの主要な協力者であったマルセイユ副伯ギヨーム（Guillaume de Marseille）は、本拠地マルセイユからカシス（Cassis）までの土地に加えて、新たにトレ（Trets）地方、トゥーロン（Toulon）地方、そしてグリモー（Grimaud）、サン=トロペ周辺地域を獲得した。そしてそれらマルセイユ副伯の新たな領土にはさまれるような形で、イエールからボルム（Bormes）にかけての海岸地域の土地を与えられたのが、フォス家（Les Fos）であった[6]。以下、このフォス家の10世紀から13世紀にかけての動静を中心に、イエールの歩みを簡単に追っておこう。

フォス家の本拠地は、その名の通り、地中海に面したフォス（現在のフォス=シュル=メール／Fos-sur-Mer）であった。マルセイユの西およそ45キロ、隣り合うマルティーグ（Martigues）からは約10キロの、海に突き出た小半島に広がる集落と、その中心の小丘に建つ城塞からなっていた（現在フォスの街の東西はコンビナートとなってしまっている）。そもそもフォスの一族は、10世紀にアルル大司教マナセス（Manassès）からフォスの城の守備を任されたのだが、マナセスの死後もその城にとどまり続け、事実上そこを世襲で所有するようになった。初代とされるポン・ドゥ・フォス（Pons de Fos）は、もとはマルセイユ副伯家に連なる一族の者とも言われるが、必ずしも確かなことではない。彼の名前は、イスラーム勢力駆逐後の土地分配について触れた10世紀終わり頃のサン=ヴィクトール修道院文書《Bref de La Cadière》の中に現れる。その頃にはすでに「副伯」（vicomte）を名乗っていたようである。イスラーム勢力駆逐後には、フォスの領主であるとともに、イエールの領主としても知られるようになる。フォスの城に隣接する塩田からの収益も大きく、「塩の領主」とも呼ばれた。10世紀末にアルル大司教によって創建されたサン=ジェルヴェ=ドゥ=フォス修道院（Abbaye Saint-Gervais-de-Fos／フォスからさらに海沿いに突き出た場所にあったが、現在は消滅）の建設にも大きく関わっている[7]。

ポン・ドゥ・フォスは、11世紀に入ってから、フォスならびにイエールの領地について、プロヴァンス伯の上級封主権を拒否するようになった。1018年からは同様にプロヴァンス伯に従おうとしないカステラーヌ家（les Castellane）やレ・ボー家（またはボー家／les Baux）とともに、プロヴァンス伯（ならびにマルセイユ副伯家）と3年間にわたって武力抗争を繰り広げている。イエールの標高200メートルの小山の上に最初の城が築かれたのはこの頃のことであると思われる。城は、《castrum／castellum》として11世紀初めに築かれて後は、11世紀後半から12世紀を通じて、フォス家のこの地における私城（château privé）として整備・拡張された。とりわけこの地が、その東西を長年のライバルであるマルセイユ副伯領にはさまれていたこともあって（そしてマルセイユの後ろ盾でもあるプロヴァンス伯に対抗するという意味においても）、その軍事的拠点としての重要性は極めて大きかった。

フォス家はこの時代、断続的にプロヴァンス伯、マルセイユ副伯らと対立を続けるのであるが、11世紀後半にプロヴァンスにその支配権を伸張させてきたバルセロナ伯（後のアラゴン王家）に対抗する形で、12世紀に入るといったんトゥールーズ伯（Raymond de

Saint-Gilles）に従う。実際トゥールーズ伯のもとで第1回十字軍にも参加している。しかし結局は1115～1116年にかけてのバルセロナ伯レーモン・ベランジェ3世による南仏遠征、さらには1147年のバルセロナ伯レーモン・ベランジェ4世（プロヴァンス伯としては2世）の遠征によって敗北し、1151年になってフォス家（Pons V）は、レ・ボー家など、バルセロナ伯に対抗的であった南仏の他の諸侯と共に伯に臣従することとなった[8]。フォスとイエールの城についても、伯の封建的封主権を承認している。レ・ボー家はこの後も1155年と1162年に伯に対して反抗するが、フォス家がそれに同調することはなかった[9]。

しかしこうしてバルセロナ伯に屈して後は、フォス家の退潮が次第に加速化してゆく。すでに12世紀後半には、フォス家は本拠地のフォスの地とその周辺（特にベール湖 l'étang de Berre）における権益を狙うポルスレ家（les Porcelet）と争った。ポルスレ家は、プロヴァンス伯（バルセロナ伯家、すなわちアラゴン王家）の後ろ盾を持つアルルの領主であった[10]。結局ポルスレ家に有利な形でフォス家は和平を結ぶ。1196年、フォス家はペルピニャンにおいてあらためてアラゴン王にしてプロヴァンス伯のアルフォンス2世（Alphonse II d'Aragon et de Provence）に臣従を誓ったが、その直後にアルフォンスが没すると（1196年）、ほどなくフォス家（Amiel de Fos）はイエールにおいて再び伯に対して反抗を試みた。プロヴァンス伯位はアルフォンスの子で同名のアルフォンス2世（Alphonse II de Provence／1193年にフォルカルキエ伯ギヨームの娘と結婚してその領土を併合）をへて、1209年にレーモン・ベランジェ3世（または5世／Raimond Bérenger IV ou V）が継承した。イエールを伯の手勢から奪ったフォス家は、イエールの住民とともに伯の差し向けた軍勢に抵抗するが、しかし結局は持ちこたえることができず、開城するに至った。1213年に取り決められた戦後処理において、フォス家はイエールの城の所有は引き続き認められたものの、これ以降、二度と伯に対して反旗をひるがえすことはなかった。またこの時、イエールの住民（この街に住む騎士たちと商人たち）も伯に莫大な賠償金を支払うこととなった[11]。

13世紀半ば（1246年）になると、今度はアンジュー家のシャルル・ダンジュー（Charles d'Anjou）が婚姻関係（1246年、プロヴァンス伯レーモン・ベランジェ4世の末娘ベアトリスと結婚）によってプロヴァンス伯位を獲得することとなる。フォス家（Roger de Fos ら）はこの時にも新しい伯による支配に対して抵抗の姿勢を見せるが、少しばかりの局地戦ののち、結局はそれを受け入れざるを得ず、1257年9月、タラスコンにおいて伯に臣従した。シャルル・ダンジューは、フォス家からイエールの城と街をすべて奪い、その代わりとしてボルム（Bormes）やラ・モール（La Môle）、カヴァレール（Cavalaire）、ル・カネ（Le Cannet）、ピエールフー（Pierrefeu）などの土地を与えた。ここにおいて、フォス家による長きにわたるイエール支配の時代はついに終わりを迎えたのであった[12]。この後イエールにはプロヴァンス伯の代官が置かれることとなり、しばらくの間アンジュー家の支配が続く。1481年にルイ11世によってプロヴァンスがフランス王国に併合された後は、イエールもフランス王国の一部となった。

イエールは、そもそもフォス家によって城が最初に築かれた 11 世紀初め頃にはいまだ人跡まばらな土地で、その周辺地域に建てられたいくつかの教会や礼拝堂を囲むようにして小さな集落が点在するという有り様であった。そうした教会や礼拝堂の多くは、サン=ジェルヴェ=ドゥ=フォス修道院あるいはマルセイユのサン=ヴィクトール修道院の所有であったが、そのほとんどはすでに消滅して現在は残っていない[13]。11 世紀から 12 世紀にかけて、城の南側に小規模な市域（ブルグ）が出現する。この市域は防壁で囲まれており、それ自身が城壁で要塞化されていた城をその中に含み込むようにして、一種のカストルム（bourg castral）を形成していた。11 世紀中には、そのブルグ／カストルムの内側の城に近い場所に、教区教会（église paroissiale）としてサン=ピエール教会（Église Saint-Pierre）があったとされ（後述）[14]、さらにその市域の東端部に、サン=ポール教会（Église Saint-Paul）が建てられていた。後者の名は 1056 年の史料に見出せるが、現在イエールの街の中に建つサン=ポール教会には、その当時の面影を伝える部分は少ない（現在の聖堂は 12 世紀後半のもの。これも詳しくは後述）[15]。12 世紀半ば頃には、テンプル騎士団がイエール方面に進出し、少なくとも 12 世紀終わり頃にはイエールの街の中に大きな拠点（maison）を構えるようになっていた。イエールの有名なテンプル騎士団の塔（Tour Saint-Blaise des Templiers）が建てられたのもやはりこの時期のことである（後述）。

先にも触れたように、13 世紀半ばにはシャルル・ダンジューがプロヴァンス伯となるのであるが（1266 年からは兼ナポリ王）、1309 年にプロヴァンス伯位を継いだその孫のロベール（Robert d'Anjou／またはナポリ王ロベルト 1 世）の時代になると、プロヴァンスとナポリ間の行き来を容易にする狙いもあって、イエールの城と街の整備・強化が図られた。現在遺構が残る城は、シャルル・ダンジュー以降のプロヴァンス伯の時代にかつての城塞を改築・拡張する形で築かれたものである。一方その頃には、カストルムのうち、城に隣接する上部地区からは次第に住民が離れ、その過疎化・無人化が進行したが、塩田の経営もあって繁栄していたイエールの人口自体は増加し、市域はもともとあったブルグ／カストルムからさらにその周壁を越えて東側に拡張していった。その新しい市街（la ville basse）の防御のための周壁建設が、イエールの住民の負担によって建設されることがプロヴァンス伯ロベールの時に求められたという[16]。かつてのブルグ／カストルムである山手地区（la ville haute）と新市街を分ける壁は、北はおよそ現在のバルバカーヌ通り（rue Barbacane）からサン=ポール教会の南側をへて、カファブル通り（rue Cafabre）に沿って築かれていた。新市街の新たな都市壁は、北は現在のランパール通り（rue du Rempart）からサン=ルイ教会の東側、さらにストラスブール通り（cours Strasbourg）からマシヨン門（Porte Massillon）をへて西へ向かい、ジェネラル・ド・ゴール大通り（avenue Général de Gaulle）、イル・ドール大通り（avenue des Îles d'Or）に沿う形で築かれた。イル・ドール大通りには、マシヨン門と共にこの都市壁に設けられていたフヌイエ門（Porte Fenouillet）を現在でも見ることができる（この門の上は、今は住居となっている）。

以上、フォス家の登場からアンジュー家の支配に至るまでのイエールの歴史を大まかにたどってきた。次に、同じ時代に建てられたイエールの主要な中世キリスト教聖堂について、それぞれ現地調査（2016 年 3 月に実施）を踏まえた考察をも交えながら見てゆきたい。

２．サン=ピエール教会（Église Saint-Pierre／遺構）

イエールの城は、最初 11 世紀に市街を見下ろす小山の上に築かれているが、その小山の中腹の、かつてのブルグ／カストルムである山手地区（la ville haute）と城郭地区の境にあたる場所に、イエールで最も古いとも言われるサン=ピエール教会の遺構が残っている。旧市街のテンプル騎士団の塔からサン=ポール・コレジアル教会をへて、サン=ベルナール通り（rue St-Bernard）を上り、1920 年代に建築家 Robert Mallet-Stevens によって設計されたヴィラ・ノアイユ（Villa Noailles）の玄関入口からさらに約 40 メートル。教会の名前からつけられたサン=ピエール通り（rue St-Pierre）の山側の斜面にある。

この聖堂はイエールの最初の教区教会であったとも言われ、トゥーロン司教の管轄下に置かれていた[17]。11 世紀末の史料には、このサン=ピエール教会が建設途中であることが記されているが、1989 年にサン=ピエール教会の遺構において行われた考古学的調査では、13 世紀半ば以前に遡るような証拠は見つかっていない。実際、11 世紀末の史料の信憑性には疑問も多いとされる[18]。あるいはその古い聖堂はいったん完全に破壊されてしまい、13 世紀以降に新たに聖堂が建設されたとの見方も不可能ではない。いずれにせよ、トゥーロン司教とシトー修道会との間で交わされた 1221 年の文書にその名が現れ、1268 年にはトゥーロン司教座聖堂の支配となっている。14 世紀に入ると（あるいは 13 世紀中に）、カストルム（山手地区）の城に隣接する上部区域から人口が減少して無人化に向かってゆくのに呼応するかのように、サン=ピエール教会はその教区教会としての資格を失い、トゥーロン司教区関連の文書からもその名前が消える[19]。さらに時代が下って 18 世紀（1765 年）になると、青色苦行会（Pénitents Bleus）の所有となるが、19 世紀にはついに放棄され廃墟となってしまった[20]。

聖堂の遺構がある場所は、イエールの市街を見下ろす高台にあたる。聖堂の平面プランは長さ 16 メートル、幅 14 メートルの長方形で、東に向いた後陣の平らな壁の土台部分が、サン=ピエール通りに面した斜面に残っている（ただしこの聖堂は正確に東西方向を向いているのではなく、後陣は少し南東を向いている）。聖堂内部は、主身廊の両側に、それより少しだけ狭い側廊が並び、それぞれが 4 つのベイからなる。したがって、聖堂内部にはそれらのベイを構成していた 6 本の柱の土台が残されている。最も東側の 2 本の柱の土台が他のものよりも大きい。最も西のベイと、そこから東側の 3 つのベイの間には壁が設けられていた。さらに後陣の壁の内外両側と南側の壁の西端などに複数の貯水槽（citern）が見られる。これらはこの聖堂よりも古いものであるとされる[21]。聖堂の最も西のベイの南北には、聖堂の

背後の岩場に隣接するようにして壁が残されている。大きさは必ずしも均一ではないが、長方形の切石が整然と並べられるようにして積まれている。南北とも、壁の内側にピラストル（壁付き柱）が残されていて、やはり南北ともに、最西端のそれは、太い多角形の柱の左右に細い多角形の柱が付くという束ね柱（ピア）の形をしている。聖堂のヴォールトは失われている。聖堂内部では、西から 2 番目と 3 番目のベイ床面の下を中心にして、170 もの墓が見つかっている。その多くが頭を西に向けて埋葬されていた。遺骸は男女ともで、子供のものも多く見つかっている。中には大人と子供が一緒に埋葬されている墓も見つかっている。《IHS》と刻まれた指輪とともに見つかった遺骸は聖職者のものであろう[22]。墓から見つかったコイン、装具品、装飾品、陶器の破片、メダルなどは、16〜17 世紀のものが多い[23]。しかし先にも述べたように、この聖堂は 13 世紀半ばには存在していたと考えられるので、発見された埋葬品の年代だけをもって、この聖堂自体の成立年代を決めることはできない。より古い時代の墓を掘り返したり再利用したりしてあらたな埋葬を行っていた可能性もあるのである。

３．サン=ポール・コレジアル教会（Collégiale Saint-Paul）

建設は 12 世紀で、アラゴン家のプロヴァンス伯アルフォンス 2 世（Alphonse II de Provence）による 1182 年の文書の中に、その名が確認される。14 世紀までイエールの山手地区（la ville haute）を取り囲んでいた市壁のすぐ内側にあって、この市壁に設けられていた城門の一つに隣接する形で建てられており、聖堂後陣部は市壁の一部をなしていた。したがって、このサン=ポール教会の出入口は、後陣とは反対側、すなわち山手地区の内部に向けられた西側に開いている。14 世紀からイエールの市街が山手地区からさらにその市壁を越えて新しい市街区（la ville basse）に広がり、それを取り囲む新たな市壁が建設されたが、この二つの市域を隔てる山手地区の古い市壁はそのまま残された。城塞のすぐ下の高台にもともとあったサン=ピエール教会（前述）が 14 世紀以降衰退していくのに対して、サン=ポール教会は、イエールの教区教会（église paroissiale）としての地位を、1221 年にはすでに獲得し、その後もトゥーロン司教の管轄下に置かれるなどして、イエールにおいては新市街のコルドゥリエ教会（のちのサン=ルイ教会）と競合しつつも、重要な地位を維持し続けた。1434 年にトゥーロン司教ニコラ・ドラコニ（Nicolas Doraconis）が教皇の同意を得てサン=ポールを「コレジアル教会」（大聖堂すなわち司教座聖堂に準じ、聖堂参事会によって運営される）へと「格上げ」しようとしたが、それによって司教座都市の地位までイエールに奪われるのではないかと心配したトゥーロンの住民が、プロヴァンス伯（ルネ・ダンジュー）を動かすなどしてこれを阻止した。結局その「格上げ」が実現したのは 1572 年のことであった[24]。それと同時に、拡張工事が開始され、12 世紀の聖堂の南側に、その身廊とは直角方向に向けて

ゴシック様式の新しい聖堂の身廊と後陣が増築された。古い身廊部をそのまま拡張しなかったのは、聖堂東側が斜面になっていて高低差があることがその理由であろう。今日、イエールの旧市街から見上げると、扶壁の並ぶ聖堂の大きな建物がすぐに眼に入ってくるが、これは16世紀に新たに増築された身廊部分である。時代が下って、18世紀も後半頃になると、聖堂の傷みが激しくなり、修復の手が幾度も加えられた。フランス革命の後は、やはり老朽化が進んだことと、イエールの新市街の住民たちの利便性なども考慮され、1842年に教区教会としての地位を、新市街にあるサン=ルイ教会に譲ることとなった[25]。

拡張される以前の、12世紀にさかのぼる古い部分は、東西方向（より正確には後陣が南東方向）に延びる単身廊のロマネスク様式である。東側にあったかつての半円形後陣は、16世紀の拡張工事の際に取り壊された。現在その部分は、平たい立面の壁となっていて、下部には方形のポルタイユがつけられ（現在はこの扉口がメインのもの）、さらに東のサン=ポール広場（place St-Paul）に向けて降りるおよそ30段もの石段が設けられている（後陣の壁は、かつてはその石段の上半分あたりまでの部分を占めていた）。一方、西側のファサードには、その中央に、長さの長いクラヴォー（claveau／楔石あるいは迫石）から構成され、なめらかなモールディングに外側を縁取られた半円形の大きなアーキヴォルト（ヴシュールのアーチ）があり、その下にポルタイユ（扉口）が開いている。そのアーキヴォルトは、彫刻装飾や円柱などはまったくなく、非常にシンプルでありながらも、同時に力強く、かつ美しい（図1）。クラヴォーの長さが長いために、中央から外側の四方に向けて、まるで輝かしい光が大きく放射されているかのような印象さえ受ける。アーキヴォルトはそのままの長さ（つまり大きな横幅）のまま、ポルタイユの左右両側において地面に据えられた基壇まで降りている。実は最近までこのポルタイユは、中の扉口が埋めて塞がれ、しかも向かって左側半分に後の時代の造作のない扉口が無惨にも開けられて、元の形が大きく損なわれていたが、2000年代に入ってそれが取り払われ、幸いなことに本来の形に修復された。なお、同じようなアーキヴォルトの仕様を持つポルタイユは、イエール市内では、テンプル騎士団の塔の南北の壁につけられた扉口（後述）と、サン=ポールから北へおよそ100メートルのフール・コヴァン通り4番地（4, rue Four-Cauvin）の建物の入口にも見ることができる。

西ファサードには、このポルタイユの上の三角形の切妻上部中央に丸窓が開けられている。またファサードの中央より向かって右側にずれる形で鐘塔（鐘楼）が建てられている。最も下の部分はロマネスク期のもので、その内部には上に登るための螺旋階段がつけられている。鐘塔の丸い時計がついている部分とその上の段はおそらく16世紀、最上部は18世紀のものとされる[26]。

古いロマネスク期の身廊部分は、16世紀の拡張・増築によって、新しい聖堂全体から見ると、ナルテクス（玄関間）のような役割を果たすようになった。内部の左右両側には壁アーチがつけられている。北側の壁には開口部は半円頭部の小さなものが1つ開くだけである。16世紀の新しい聖堂部分は3ベイからなる身廊の南に、内陣と後陣が続く。身廊の各ベイと

内陣は尖頭形の横断アーチで区切られ、それぞれの天井は交差リブ・ヴォールトである。後陣は、どちらかと言うと平たい五角形で、南端の面を中心にして、窓のない面を隔ててそれぞれ南北の面に尖頭形頭部を持つゴシック様式の縦長の窓が開いている。外壁は、地形自体が北から南へと傾斜しているために、とりわけ後陣部において非常に高さがあり、そこを取り巻くようにして付けられた扶壁（バットレス）の高さもやはり高い（図２）。この部分は、新しい増築が行われる前にこの場所にあった建物の土台の上に建っている。16 世紀の身廊は、内部では東側に 3 つの祭室が並び、北側には大きさの異なる 3 つの祭室が台形状に（北から南に向かうほど小さくなるようにして）並んでいる。身廊外部では西側の壁には上部（つまり祭室の部分の上）に細長くて小さな窓が並ぶが、全体的に石壁の量塊感が支配的である。また東側（イエールの市街に向いた側）の壁については、内陣部の南側にかつての市壁の塔が残るが（現在は内部は聖具室）、しかしその塔も含めて東側の壁全体に途中の高さまで住居が接続して建てられていて、聖堂の扶壁とその間に開けられたゴシック様式の窓が並ぶ様子は、聖堂の下からではなく遠く離れないとよく見えない。

サン=ポール・コレジアル教会は、1980 年代以降、繰り返し建物や内装の修復・改修が行われてきたが、2009 年からは本格的な改修工事のために閉鎖されてしまい、内部に立ち入れない状態が続いている。2016 年末にいったん工事が終了したようであるが、2017 年 1 月現在でもまだ本格的な公開には至っていないようである。この聖堂は、ナルテクス、つまり古いロマネスク期の身廊部に飾られた数多くの奉納額（ex-voto）のコレクションでも知られている。かつてはノートル=ダム=ドゥ=コンソラシオン教会に納められていたものであるが、1944 年にその教会が取り壊されたため、サン=ポールが引き継いだ [27]。その総数は 400 あまりにのぼり、19 世紀半ば頃のものを中心として、最も古くは 1613 年のものから今日のものまで、時代ごとの日常生活や人生のエピソードなどのさまざまな場面が描かれている。病気治癒を祈願したり、事故で助かったことを感謝するものなども多いが、海や漁に関するものは意外と少ない。中には第二次世界大戦で命拾いしたことを感謝するものも見られる [28]。4 世紀もの長きにわたる、イエールの人々の生活の様子や風俗、住居や室内の変遷などがうかがえて大変に興味深い。この奉納額のコレクションも修復作業を経て近々再び聖堂内に飾られる予定であり、同時にウェブでも見ることができるようになるとのことである。

図２　サン=ポール教会の現在の後陣

図１　サン=ポール教会西ファサードの
アーキヴォルト

なお、サン=ポール・コレジアル教会の北およそ 100 メートルのパラディ通り（Rue Paradis）の 6 番地の角には、13 世紀に建てられたロマネスク時代の家（Maison romane）が残っている。その時代のイエールのカストルムすなわち山手地区（la ville haute）は、限られた土地に対して人口が増えており、住居 1 軒あたりの面積は小さい。そのぶん住居は上に階を重ねた。このロマネスクの家も、大きさは小さいが、高さが 3 階まである。斜面に建っていて、北面と東面にはそれぞれに、小さな半円アーチが横に 2 つ並ぶ窓が開いている。丸い実をつけたようなアカンサスの柱頭彫刻と方形の冠板を備えた小円柱が、その 2 つのアーチの真ん中を支えている。その仕様は、次に見るテンプル騎士団の塔の南北の壁に施されたものとよく似ている。東面の壁には大きなアーチを持つ出入口があるが、半分は埋められている。斜面に面した北側の壁にも、東側のそれよりは大きさ（横幅）が小さい出入口が開けられている。この家を見ると、13 世紀のイエールの、おそらくは経済的に裕福であった住民たちの、その豊かな生活ぶりをうかがい知ることができる。

４．テンプル騎士団の塔またはサン=ブレーズ礼拝堂
（Tour des Templiers ou Chapelle Saint-Blaise）

テンプル騎士団がイエールに進出したのは、すでに述べたように 12 世紀半ば頃からである。1156 年にアルル大司教がイエールのサン=マルタン教会（現存せず）をテンプル騎士団に与えたのが最初である。その後 12 世紀の間に騎士団はイエールに拠点を築き、その世紀の終わりにはコマンドリーの指揮官の名がイエールの史料にも現れるようになる。騎士団はイエールおよびその周辺で広い土地を所有し、そこからの収益を得るとともに、マルセイユ、トゥーロン、ニースなどとも交易を行っていた[29]。1312 年にテンプル騎士団が解体されると、イエールのコマンドリーおよびその所有地は、聖ヨハネ騎士団（マルタ騎士団）が引き継いだが、17 世紀まではさまざまな個人に貸し出されるなどした。1673 年にイエール市が年間 210 リーヴルで長期間賃貸することとなり（礼拝堂は青色苦行会が使用）、さらに 1765 年からはイエール市が建物全体を、家畜小屋、穀物倉庫、さらには商店などとして活用した。19 世紀になると地上階と上層階の間に中間層が作られ、イエールの市議会もそこを使うようになった（第一次大戦まで）[30]。その後、1985 年から 1991 年までの間に修復工事が進められ、今日ではさまざまな展示会、イベント、文化事業などに用いられており、文字通りイエールの街のシンボルとして観光客を集めるに至っている。

この建築は、西から東へとゆるやかに傾いた斜面に建っていて、東西の長さが 18.65 メートル、南北の幅が 8 メートル、高さは 16.7 メートルである[31]。幅の狭さに対して高さがかなりあることから、一見して「礼拝堂」というよりもむしろ「塔」としての印象が強く感じられるものとなっている。実際、テンプル騎士団支配下では、この建物は礼拝堂としての役割と、要塞としての役割を同時に果たしていた。

西側のマシヨン広場（place Massillon）から見ると、半円形の後陣が地上から最上階のテラス部分までそのまま立ち上がっていて、そのすらりとした端正で美しい姿は非常に印象的である（図３）。現在の入口は、建物の北側に開いているが、以前の扉口は南側の壁に開いていた。それは、サン=ポール・コレジアル教会（前述）と同じように、細長いクラヴォーが放射状に組まれたアーキヴォルトを持つ美しいポルタイユである。しかし、さらにその前の時代の建設当初は、地上階と 2 階部分の出入口が別々につけられていたのであって、これはもっぱら防御的な理由によるものと思われる。南側の壁には、いくつかの開口部があり、そのうちの一つは、半円アーチを 2 つ持ち、その間を冠板とシンプルな柱頭彫刻の施された小円柱が支えている。向かって左上方に、動物の頭部の彫刻が 1 つだけ残されている。西側の壁には地上階部分に方形の窓が 2 つと、さらにその上に外部に向けて隅切りされた大きな丸窓、そしてそのさらに上に細長くて狭い銃眼（狭間）が 2 つついている。北側の壁に開く現在のポルタイユは、南側の壁のそれと同様に長いクラヴォーが並ぶアーキヴォルトが載っている。この北側の壁には、地上階部分に、やはり半円アーチが 2 つ連なる開口部（南壁と同様に柱頭彫刻を持つ小円柱がアーチを受ける）と、中層階部分に半円頭部の窓が 3 つ並んでいる。ただし、現在ではその 3 つとも埋められている。北壁の上層階には小さな半円頭部の開口部と、さらにその上に、方形の小さな窓が 2 つ開いている。この半円頭部の開口部は、かつてはこの塔の隣に隣接して建てられていた騎士団の建物から、階段を経て出入りするための出入口の役割を果たしていた。同様の出入口はもう 1 つあって、半円形後陣の北側部分のほぼ同じ高さの位置（しかし少しだけ下がったところ）に今でもその痕跡があり、その出入口自体は埋められているが、アーチの石組みが残されているのが認められる。最も印象的な東側の背の高い半円形後陣の壁には、外側に向けて大きく隅切りされた半円頭部の窓が縦に３つ連なって開けられており、そのうち真ん中（中層階）の窓は現在は埋められている。これらの窓のうち上の 2 つは 20 世紀の修復工事の前には存在せず、一番下の地上階のそれは、19 世紀には出入口として利用されていたようである[32]。後陣の壁の一番上には今は丸い時計がつけられている。

建物の内部は、地上階部分がサン=ブレーズ礼拝堂である（図４）。単身廊形式で、2 ベイからなる。コーニスから上の天井は半円形のトンネル・ヴォールトで、2 つのベイの間にはやはり半円形の横断アーチが架かる（壁付きのピア柱がそれを受ける）。高さのある南北の側壁には、二重のモールディングで縁取られた大きな半円形（ほんのわずかに尖頭形か）の壁アーチがついている。またその内側には、内部に向けて隅切りされた半円頭部の開口部（18

世紀あるいは19世紀のもの）がつけられている（ただし今は塞がれている）。凱旋アーチ（arc triomphal）から西の後陣部分は半円形で、半円頭部で縦長の窓が開き、コーニスの上には半ドーム（cul-de-four）が載る。彫刻装飾の類は一切なく、きわめてシンプルであると同時に、それゆえの美しさが感じられる。もともとはこの地上階の礼拝堂と上層階はそれぞれ独立していて、行き来ができなかった。上層階には外側から階段を伝って入るようになっていた。

19世紀に増築された中層階部分は、1985年から1991年までの修復工事の際に取り払われ、現在では上下2層のもともとの建築当初の姿が復元されている。地上階から建物の内側に新たに設けられた階段を登ると上層階（日本式の2階部分）の大きなホールに至る。天井の高さは地上階のサン=ブレーズ礼拝堂よりも低い。しかしやはりここも半円形の横断アーチで2つのベイに区切られており、天井には半円筒形のトンネル・ヴォールトが架かる。半円形の後陣部分には半ドームが載り、地上階と同様のシンプルな美しさを感じることができる。西壁には銃眼（狭間）が2ヶ所ついており、ここがもともとはテンプル騎士団の軍事的な拠点でもあったことをうかがい知ることができる。

上層階のホールからさらに狭い階段を登ると、要塞としての構造物が残る最上階のテラスに出る。そこからは、北にはイエールの城塞とそのふもとに建つサン=ポール・コレジアル教会を、そして南には地中海に突き出たジヤン半島まで見渡すことができる眺めの良いパノラマが広がっている。

図３　テンプル騎士団の塔

図４　塔の地上階、サン=ブレーズ礼拝堂

５．サン=ルイ教会（Église Saint-Louis）

13世紀後半から14世紀にかけて、それまでの山手地区（ブルグ／カストルム）の東側に新しい市街（la ville basse）が形成され、その市街区も市壁によって囲まれるが、のちにサン=ルイと名づけられることになるこの教会は、その新市街の北側の市壁のすぐ内側に建設された。その時期は13世紀であることは確かであるが、正確な年はよく分かっていない。フランシスコ修道会であったコルドゥリエ会（Les Cordeliers）が1230年代にイエールに定着し

て以降、彼らによって建てられたものであると言われるが、もとはイエールに進出したテンプル騎士団の教会であったとする見方もある。いずれにせよ、1248 年には既にあったようで、1254 年にフランス国王ルイ 9 世（サン=ルイ）が第 7 回十字軍からの帰りにイエールに滞在し、このコルドゥリエ教会（Église des Cordeliers）にも立ち寄っている（7 月 12 日）。その際の祭儀において国王の前で説教したのは、イエールのコルドゥリエ会士ユーグ・ドゥ・ディーニュ（Hugues de Digne）であった。彼の人格と説教についての評判はイエールにとどまらず、南フランスを越えて遠くまで拡がっていた [33]。そうしたこともあって、身分の高い俗人などの中には、コルドゥリエ教会に埋葬されることを望む者が増えていった。14 世紀頃になると、こうした埋葬に関して山手地区のサン=ポール教会と次第に競合するようになった。かつてのイエールの領主であるフォス家などは、このコルドゥリエ教会に墓を作っている [34]。宗教改革期には、フランシスコ修道会が「オブセルヴァンティス会（小さき兄弟会）」と「コンヴェントュアル会」に分かれるが（1517 年）、イエールのコルドゥリエ会は後者に属した。宗教戦争期の 1564～1566 年には、人心の融和を図るために国王シャルル 9 世がフランス国内の大巡幸（Le Grand Tour de la France）を行ったが、その際にイエールにも数日間滞在している。1564 年 11 月 1 日、シャルル 9 世はコルドゥリエ教会において、この地方の各地から集まってきていた病人たちに直接触れるという施しを与えている [35]。

フランス革命勃発ののち、1791 年 1 月にコルドゥリエ修道院は閉鎖され、その付属聖堂であるコルドゥリエ教会も 1793 年からは軍隊の駐留などに利用された。1796 年には国有財産として売りに出され、聖堂は貯蔵庫、納屋、穀物倉庫、家畜小屋、そしてオリーブの圧搾場などとして利用された。しかし 1822 年にイエール市が再びここを買い取り、その後、修復工事が続けられた。1835 年、旧コルドゥリエ教会は正式に「サン=ルイ教会」と呼ばれるようになり、1842 年になってイエールの「教区教会」（église paroissiale）としての地位が、老朽化が進んでいたサン=ポール・コレジアル教会から、ついにこのサン=ルイ教会へと移されることとなった [36]。それ以降も今日に至るまで、聖堂内外の修復・修築工事が断続的に進められてきた。その過程で、聖堂内外の壁につけられていた壁龕墓や装飾類が撤去されたり、新しい聖具室が加えられたり、さまざまな改築の手も加えられてきた。

ロワイヤル広場に面したサン=ルイ教会の西ファサードは、3 つのポルタイユ（扉口）を持つ非常に安定感のあるものとなっている。そのうち中央のものが最も大きく、最上部は三角形の切妻形となり、斜めになったその左右（つまり側廊部分）の天井は、中央（つまり主身廊）部分よりも一段低くなっている。中央のポルタイユの上には、非常に大きな円形のバラ窓が開いている。その両側には、左右のポルタイユの上の、中央のバラ窓よりも少し低い位置に、半円頭部で縦長の窓が開いている。かつて 1855 年につけられた西ファサード最上部のロンバルディア帯装飾は、1959 年に撤去されて現在は見られない。逆に 1855 年に撤去されたのは、中央のポルタイユを左右ではさむようにしてつけられていた 2 つの壁龕墓（enfeu／アルコソリウム）である。2 つとも外側は三角形の切妻上部を持ち、内側は半円形アーチ

になっていて、内側下部が外側に向けて隅切りされていた。これらは 14 世紀につくられたフォス家の墓と言われ、向かって左側の壁龕にかつて掲げられていた碑銘板は、現在は聖堂内部の南壁に埋め込まれている。そこには《G. DE FOSIS》という文字が刻まれていて、これは《Guillaume de Fos》（ギヨーム・ドゥ・フォス）であるが、この「ギヨーム」が、フォス家のどのギヨームなのかということについては、はっきりとは分かっていない。同様にその没年についても碑銘からははっきりしないが、13 世紀初め頃あるいは 13 世紀半ば頃なのではないかと考えられている。その碑銘版のすぐ隣には、かつて外の壁龕墓にあったもう一枚の碑銘版（15 あるいは 16 世紀）が埋め込まれているが、これについては表面の損傷がひどくて解読が難しい。フランス革命の際に傷つけられたものであるという[37]。

西ファサード中央に開いているポルタイユは、最も外側を三重の細長いモールディングで縁取りされ、その内側は白と黒のクラヴォーが交互に並ぶ半円形のアーキヴォルトになっている。さらにその内側は合計 8 つのヴシュールが外から内へ向けて次第に奥まっていくように並べられている。そのヴシュールのうち 4 つは、ポルタイユの左右において、巻き上がるアカンサスの柱頭彫刻を持つ細長い円柱に受け止められている。それらの円柱は地面に設けられた基壇の上に立っている。ポルタイユの半円形のタンパンは木製で、四方に広がる円柱がテーマとなっている。西ファサードの左右両側に開いている側廊の 2 つのポルタイユは、中央のそれよりも小さく、ヴシュールの数も 6 つである。この側廊のポルタイユは、かつて西ファサードの外部にあったフォス家の 2 つの壁龕墓が撤去された際に、中央のポルタイユと同じ様式で新たに開かれたものである。

中央のポルタイユを入るとすぐに階段（10 段）となって、聖堂内部に下りる。眼に入ってくるのはシンプルな直線と曲線の組み合わせからなる安定した全体的構成と石積みの量塊感である。内部の柱や壁などは石積みがそのまま残されている（上塗りなどはされていない）。堂内は照明を点灯しないと薄暗く、13 世紀の静かで厳粛な雰囲気がよく伝わるものとなっている。もとは典型的な南仏ロマネスク様式であり、その姿を今によく残しているが、ゴシック様式による幾多の改修が加えられてきた。平面プランは、主身廊とその両側の側廊からなる 3 廊式で、トランセプトはない。北側の側廊のさらに北には、尖頭アーチの中に小さな祭室（礼拝室）が 6 つ並んでいる。一方、南側の側廊につけられた祭室は、内陣のベイの南側に 1 つあるだけである。後陣は円形ではなく平たい平面プランなので、サン=ルイ教会は、主身廊と側廊が同じ長さで東西約 70 メートル、南北幅約 17 メートルの長方形である。主身廊の高さは約 15 メートル、側廊の高さはそれより低く、約 12 メートルである[38]。

主身廊は、祭壇のある内陣も含めて 5 ベイからなる。わずかに尖頭形となった横断アーチに区切られた各ベイの天井は 4 分交差リブ・ヴォールトである。そのリブは、横断アーチを支えるピラストル（壁付き柱）の上方において左右につけられた小さなキュ・ドゥ・ランプが受け止めている。凱旋アーチには小さな丸窓が 1 つ開き、その先のほぼ正方形の平面プランによる後陣部は、高さは身廊部より低いが、天井はやはり 4 分交差リブ・ヴォールトであ

る。後陣の東壁には、半円頭部の縦長の窓（ランセット窓）が 3 つ並んでおり、中央の窓が少しだけその両側のものよりも長くなっている。主身廊と南北の側廊は、それぞれピア（束ね柱）の間に開く 5 つの大きな尖頭形のアーチで分けられている。側廊の幅は主身廊よりも狭く、天井も主身廊のそれよりも低い。南北それぞれ半円筒形（ほんのわずかに尖頭形か）のトンネル・ヴォールトが架かる。南北の祭室および主後陣の左右の小後陣は交差リブ・ヴォールトとなっている（小後陣には横断アーチなしに交差リヴが 2 組並んでおり、それらのリブは卵形のキュ・ドゥ・ランプが受ける）。側廊の各ベイの外側の壁の上部および祭室の壁には、半円頭部で内側に向けて隅切りされた開口部（窓）が開けられている。ただしそれらは決して大きくないので、採光の役割はあまり果たしていない。各祭室の窓は 19 世紀になって開けられたものである。主身廊西端の階上席には、1878 年製の大きなオルガンが据えられている [39]。西から 4 番目のベイの南側には大きな聖具室がある。この部屋には木製の見事な聖具棚が備え付けられている。また南側の側廊の西から 2 番目のベイには宝物展示室と来訪者のための応接室が設けられている。

北側小後陣のさらに北にある祭室は、ノートルダム・ドゥ・ルルド礼拝堂（Chapelle Notre-Dame de Lourdes）で、ここだけ内部がきれいに上塗りされて新しい。天井には八角形の窓が開き、星形の装飾的なリブがその窓を取り囲んでいる。礼拝堂の祭壇は 1858 年にベルナデットの前に出現した聖母マリアを再現したものとなっている。この礼拝堂から、サン=ルイ教会の東側の道路に出ることができる。ストラスブール通り（cours Strasbourg）に面した後陣外壁は、上部が三角形の切妻形となっていて、内部の主後陣と左右の小後陣に対応して、合わせて 5 つの縦長の窓（ランセット窓）が開いている。言うまでもなく中央のそれが最も長さが長い。その真下にはこの聖堂が革命期以降に倉庫や家畜小屋などとして使われていた時代に開けられたかつての出入口の痕跡が残っている。後陣南側の壁にもランセット窓が 2 つ開いている。

イエールのサン=ルイ教会は、方形の後陣とそこに縦長の窓が 3 つ開く様式において、南フランスにおけるシトー修道会の聖堂建築であるボスコドン（Boscodon）やヴァルボンヌ（Valbonne）、あるいはシルヴァカーヌ（Silvacane）、などと共通する。西ファサードに開けられた大きな丸窓（oculus）などは、やはりシルヴァカーヌ、ヴァルボンヌ、ル・トロネ（Le Thoronet）、そしてディーニュのヴァルクロワッサン（Valcroissant）、あるいはオート=プロヴァンスのシストロン（Sisteron）、アンブラン（Embrun）、ディーニュ（Digne）の大聖堂といったロマネスク後期の建築群の先行例を持つものである。また 5 ベイからなる身廊部の構造も同様で、12 世紀半ばのアルルのサン=トロフィーム（St-Trophime d'Arles）やマルセイユのサン=ローラン（St-Laurent de Marseille）などと類似している。しかしこれらはゴシック初期の影響を受けたものでもあり、イエールのサン=ルイ教会も、ロマネスク後期の様式を色濃く取り入れながらも、南フランスにおけるレイヨナン式ゴシック様式の最初の到来を告げ知らせる例の 1 つとなっていると言えるのである。そしておそらくこれは、13 世紀以降ア

ンジュー家がプロヴァンス伯となったことが大きかったのではないかと考えられる[40]。

図５　サン=ルイ教会、西ファサード

図６　サン=ルイ教会内部、主身廊

７．オルビアのサン=ピエール・ドゥ・ラルマナール修道院（遺構）

（Abbaye Saint-Pierre de l'Almanarre, Olbia）

オルビアは、紀元前 4 世紀前半頃にマッサリア（現在のマルセイユ）がギリシア人の植民・交易のために築いた拠点であり、その遺跡は現在のイエール市街から南へ約 5 キロ、ジアン半島の付け根のすぐ西側にあたる海岸沿いにある。20 世紀に行われた考古学的発掘によって、約 160 メートル四方の城壁で囲まれた比較的小さな四角い都市的聚落の姿が明らかとなった。メインゲートはこの街を東西に貫くメインストリートの東端、すなわち東の壁の中ほどに造られていた。これはオルビアの港との間を行き来するためのものである（それ以外の南北西の城壁には門はなかった）。城壁内部は、ギリシアの都市建築家ヒポポダモスの幾何学的都市計画原理を思い起こさせるように、極めて整然とした碁盤状の都市計画によって区画されている。街路によって分けられたそれぞれのブロックは、さらに整然と細かく分割されて住居や商店を構成している。西側の壁沿いには「アルテミスの神域」があり、アルテミスに捧げられた奉納物や、それを供えるためのニッチが見つかっている[41]。街のほぼ中央にある区域には公共の井戸の跡（深さ 8 メートルで、紀元 3 世紀頃に塞がれた）や、通りに沿って立ち並ぶ商店の遺構があり、これらの商店にはワインなどを貯蔵したと思われるカメの跡が残されている。大通りに商店が面するやり方はローマ時代には一般的であり、この部分には紀元前 1 世紀頃にオルビアに住むようになっていたローマ人による改築がうかがわれる。ただしこの部分では、同じく紀元前 1 世紀に火災が起こった跡があり、その後は再建されなかったようである[42]。ローマ時代の建築物としては、このほかに、街の北端にある浴場や、メインゲートの外にあたる海沿い（県道 D559 の南側）に見つかったローマ時代の浴場などがある。この後者の浴場は、19 世紀半ばに発掘されたものであるが、正確な建設年代は分かっていない。おそらく紀元 2 世紀終わり頃にオルビアの城壁が取り壊された際に造られたものと思われる[43]。

古代末期から中世にかけてオルビアは、海水の浸入とメロヴィング時代になってからの治安の悪化などにより、7 世紀にはいったん放棄された。その後、東側の区域の土地が墓地となるが、13 世紀初めには女子修道院が創建された。しかしそれも治安の悪化などの理由で閉鎖され、オルビアは 14 世紀には再び放棄された。その後は農地などとして利用され、周囲には庭付きの大きなヴィラも建ち並んだ。歴史的な関心を集めるようになるのは 19 世紀以降のことで、第 2 次大戦後にはボルドー大学のジャック・クプリー（Jacques Coupry）による大規模な発掘調査が行われた。1955 年に国の所有となったあと、現在はイエール市のもとで引き続き発掘調査が継続されている[44]。

今触れた 13 世紀創建の修道院というのは、オルビア遺跡の北東地区にその付属聖堂の遺構が残るサン=ピエール・ドゥ・ラルマナール修道院である。1221 年に創建されたシトー派の女子修道院であった。ここにはもともと、ベネディクト派のサン=ジェルヴェ=ドゥ=フォス修道院（Abbaye Saint-Gervais-de-Fos, Fos-sur-Mer）の所有するサント=マリー・ドゥ・ラルマナール教会があったが、1220 年に教皇ホノリウス 3 世の意を受けたコンラッド枢機卿がこの修道院を閉鎖したのち[45]、現在のオーバーニュの東にあったサン=ポン=ドゥ=ジェムノ修道院（Abbaye Saint-Pons-de-Gémenos）から修道女がやってきて、この地にサン=ピエール・ドゥ・ラルマナール修道院が創設された。1223 年にこのサン=ポン=ドゥ=ジェムノ修道院がシトー修道会の傘下に入ったことにより、サン=ピエール・ドゥ・ラルマナール修道院もシトー派の女子修道院となった（Abbatia Sancti Petri de Almanarra）[46]。なお、もともとあったサント=マリー・ドゥ・ラルマナール教会と新たに創られたサン=ピエール・ドゥ・ラルマナール修道院付属教会の関係については実はよく分からないことが多い。前者の名前を後者のものに変えただけだったのか、あるいはこの 2 つの聖堂が並存していたのかということについてもはっきりしていない。並存していた場合は、古い方のサント=マリー教会はどこにあったのであろうか[47]。いずれにせよ、1221 年創建とされるサン=ピエール・ドゥ・ラルマナール修道院には、記録によれば、1223 年には 12 人、1330 年には 29 人の修道女がいたと伝えられる[48]。14 世紀までは修道女を受け入れていた。その中には有力家系の女子もいて、例えばマルセイユ副伯やフォス一族の家系のものが見られた[49]。修道院のそうした勢力を表しているのであろうか、敷地内の発掘では洗練された上質の皿や陶器類が多数見つかっており、それらはプロヴァンスで作られたものの他、イタリアやスペイン、そして遠くは北アフリカやシリアからもたらされたものもある。ところが 14 世紀末には戦乱や略奪、ペストなどの疫病などもあって、修道女たちはこの場所を放棄し、イエールの城壁内のサン=ベルナール女子修道院（Couvent Saint-Bernard）に移ってしまった。

サン=ピエール・ドゥ・ラルマナール修道院の敷地は、古代オルビアの北の区画の東寄りのところに位置するが、街路ならびにインシュラの区割りの軸とは多少角度がずれている。しかしそれは古代の軸線のほうが東西からずれているためで、東西方向に向けてより正確に配置されているのは修道院および聖堂のほうである。つまり聖堂の後陣はきっちりと東を向い

ているのである。修道院の敷地は 5 千平方メートルに及んだ。聖堂とクロワトル、そしてクロワトルに接してその周囲に配置された聖堂参事会室（集会室）、寝室、食堂、図書室など、ここには全体的にシトー派修道院の基本プランが採用されていた。それらの建物の南と東には助修道女の住居や畑などがあった。聖堂の東側には墓地が広がっており、1989 年から 1991 年までの発掘により、495 体もの遺骸（遺骨）が見つかっている。そのうち石棺あるいは石棺状に石板を組んだ棺に埋葬されたもの（11～12 世紀）が 140、地中にそのまま埋められたもの（13 世紀）はおよそ 190、その他は中小の石を並べた中に埋葬されていた。墓地は、ここの修道女だけではなく、この修道院の畑などで働いていた一般の俗人や、あるいは近隣の住民なども受け入れていたと言われる。中には子どものものも含まれている[50]。

サン=ピエール・ドゥ・ラルマナール修道院付属聖堂は、東西方向に向いた 2 つの身廊と、それに続く 2 つの後陣から構成されている。後陣は南北それぞれに、内側は半円形、外側は方形（つまり平ら）で、北の身廊は西端から後陣の東端まで東西の長さが 20.5 メートル、横幅 3.5 メートル、南の身廊は長さが 23.5 メートル、幅が 5.8 メートルである。出入口は西側と南側に大小あわせて 6 カ所あり、そのうち西側のポルタイユは一般の俗人用、そしてクロワトルに通じていた南側のそれは、修道女のためのものであったと思われる[51]。

年代的には南の身廊の方が古く、11～12 世紀に建設された。とりわけ古いのは後陣部分であるが、現在は土台部分の石積みのみが残り、壁やその上に載っていたと思われる半ドームなどは失われている。その石積みは小さな石を荒く積んでゆくもので（petit appareil）、現在の地表面から約 1 メートル下の床面が露わにされている。身廊は 3 ベイからなり、南北の壁には、おそらく半円形の壁付きアーチ 3 つからなるアーケードがあり、半円形の横断アーチが 2 本架かっていたと思われる。現在、崩れ落ちたヴォールトの一部がそのままこの身廊部分に残されている。西端の入口部分には敷居とその左右に置かれた側柱の一部が残されている。敷居から中に入ると、約 50 センチほどの段差で床面となる。当時は聖堂の床面には石が敷かれていたであろうが、それでも入口から中へは何段か下に降りて入った。入って最初のベイの中ほどやや東寄りのところにさらに壁の土台があり、中央に通路のようなものが認められるので、この部分は一種のナルテックスのような構造をしていたのかも知れない。石段を何段か降りて入る入口は、クロワトルに通じる南側の壁にもついていた。北の身廊との間にはピア柱の基壇部分の石組みが残されている。この基壇と北の身廊の北壁と後陣、さらに 2 つの身廊の西壁は、すべてこの聖堂建築のいわば第 2 フェーズに属するもので、およそ 13 世紀のものである[52]。

図 7　サン=ピエール・ドゥ・

北の身廊はやはり 3 ベイからなり、東に半円形の後陣が続く。ヴォールトの高さは南の身廊よりも低かった。後陣は、南の身廊のそれと同様に、内側は半円形で、外側は方形となっている。この北の身廊の後陣部（13 世紀）は、南のそれよりも大きくて形の整った石が、きっちりと積まれている。後陣の内側すなわち内陣の床の敷石はすべて取り払われてしまっているが、その内陣に接する身廊の最も東のベイについては、南北ともに側壁が一部分残っている。小さめの石の荒積みの上から漆喰が塗られている。西から 1 つ目と 2 つ目のベイの間の床には、身廊を横断するように石段があり、西から 2 つ目のベイから東は、床面がその石段の分だけ高くなっていたようである。その部分は南の身廊部よりも床が高い。したがって、北の聖堂は、その部分（身廊の東側の 2 つのベイと後陣）だけが、あたかも独立した小礼拝堂を形作っていたと見ることも可能である。この小礼拝堂に洗礼槽のような円形の構造物が見いだせるとする報告もあるが、これについてははっきりしたことは分かっていない[53]。

ラルマナール修道院遺構

サン=ピエール・ドゥ・ラルマナール修道院に関しては、中世にこのあたりを荒らし回っていたサラセン人（イスラーム）の海賊たちから身を守るために、ここの修道女たちが鼻を切り落としていたという話が伝わる。つまりみずから顔を醜くして襲われないようにすることで身を守ったというのである。あるいは海賊の来襲を教会の鐘を鳴らすことでイエールの街の住民に知らせたが、自分たちは助からなかったという話もある[54]。しかしこうした恐ろしいエピソード（とりわけ「鼻なし女」の話）は、もちろんあくまでも伝説の域を出るものではなく、それを実際に伝える史料などはない。修道女たちがこの地を離れたのも、14 世紀頃のプロヴァンスにおける戦乱や治安の悪化によるものであって、イスラーム勢力との直接の因果関係はないと思われる。そうした伝説がまことしやかに語られてきたのは、忘れられた古代の街の廃墟にうち捨てられた修道院の遺構の荒れ果てた光景が、後の人々の想像力をかき立ててやまなかったがゆえなのかも知れない。

おわりに

最初にも述べたように、フランス最南端に位置するイエールは、今日でこそコート・ダジュールの西の一角を占めるリゾート地であるが、中世初期から中期にかけては、プロヴァンスの外縁部を形作る、いわば辺境地域であった。古代ローマ時代の遺跡もプロヴァンス中央部に比べるとその数は少なく、中世における「プロヴァンス・ロマネスク建築固有の領域」からは外れた場所として認識されてきた。しかしながら、これまで見てきたように、そこは政治的にはプロヴァンス伯やトゥールーズ伯といった大諸侯と、フォス家などの在地領主の勢力争いが繰り広げられてきた場所であり、文化的にはロマネスク期の修道院や特色あるキ

リスト教聖堂なども建設され、決して文化の外縁部であるということで一括りに片づけられる地域などではなかった。むしろこうした外縁部の文化的豊かさこそが、南仏プロヴァンス全体の歴史的な文化景観を形作っていると言えるのである。今回取り上げた南仏ヴァール県について、今後の課題は、地中海沿岸から北に向けて広がる内陸部の歴史的な文化景観を、大きな枠組みとしてのプロヴァンスというマクロな視点からと同時に、ミクロな視点から分析することによって明らかにしてゆくことである。

最後になるが、本稿を執筆するにあたって実施した現地調査（2016 年 3 月）においては、イエール市観光局の角野由佳さんに大変にお世話になった。とりわけ、サン=ルイ教会やオルビア遺跡では、関係者による案内をアレンジしていただいたり、通常は立ち入れない場所に特別に許可をもらって入れていただいたりした。あらためて御礼申し上げる次第である。

※本稿で掲載した写真は、すべて筆者が 2016 年 3 月に撮影したものである。誌面の都合により掲載した画像は限られているが、それ以外の写真画像は筆者（中川）開設のウェブページ（http://nn-provence.com）において閲覧可能である。

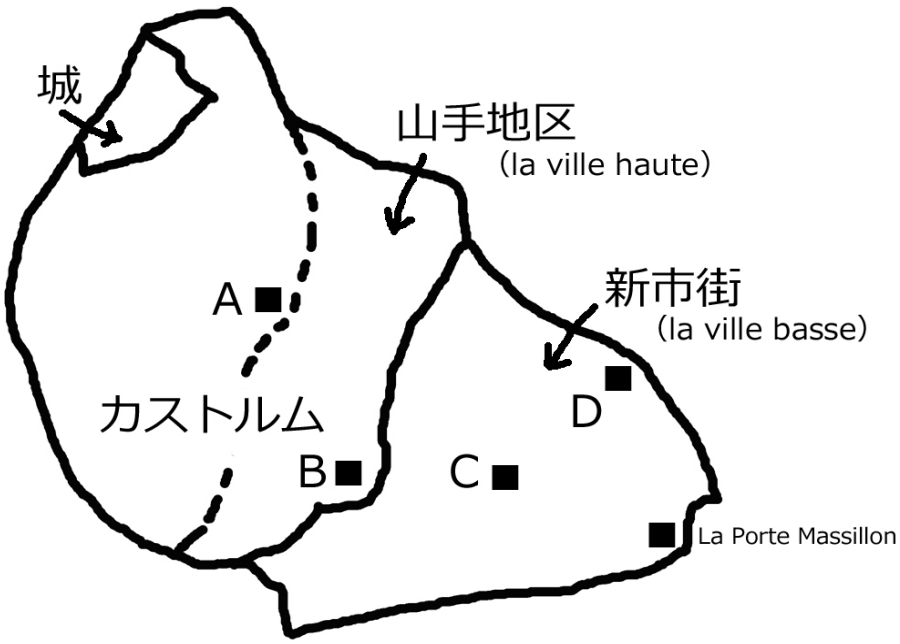

図８　イエール市街略図

A サン=ピエール教会（Église Saint-Pierre／遺構）

B サン=ポール・コレジアル教会（Collégiale Saint-Paul）

C テンプル騎士団の塔（Tour des Templiers）

D サン=ルイ教会（Église Saint-Louis）

参考文献

Abbonen, Maurice, et al., *Hyères les Palmiers, plus de 2000 ans d'histoire,* Hyères, Image et Mémoire de Hyérois & Centre de Culture et de Documentation provençales, 1993.

Aghulon, Maurice, et Coule, Noël, *Histoire de la Provence*, Paris, Presses Universitaires de France, 2007.

Amic, Charles, et Olivo, Jacques, *Hyères au moyen âge*, Hyères, Éditions C.C.D.P., 1995.

Bats, Michel,"Hyères-Site d'Olbia", dans *Congrès Archéologique de France, Monuments Du Var*, Société des Monuments Français, Paris, 2005.

Bérenguier, Raoul, *Églises et abbayes du Var*, Paris, Nouvelles Éditions Latines, sans date.

Brien, Françoise, et al.,"Hyères. Fouilles de l'église Saint-Pierre et de ses abords", dans *Archéologie du Midi médiéval*, tome 10, Centre d'Archéologie Médiévale du Languedoc, Carcassonne, 1992.

Bromwich, James, *The Roman remains of southern France*, London and New York, Routledge, 1993.

Brun, Jean-Pierre, *Carte Archéologique de la Gaule, 83-1, Le Var,* Académie des Inscriptions et Belles-Lettres, Paris, 1999.

Busquet, Raoul, *Histoire de la Provence des origines à la révolution française*, Éditions Jeanne Laffitte, réimpression, 1997.

Centre de Culture & de Documentation Provençales, *La collection Hyèroise d'ex-voto*, Hyères, Éditions C.C.D.P., 1988.

Corvisier, Christian,"Le château d'Hyères et la fortification capétienne sous le règne de Charles d'Anjou à Hyères et à Brégançon", dans *Congrès Archéologique de France, 160e Session, 2002, Monuments du Var,* Société Française d'Archéologie, Paris, 2005.

Gay, Hubert, et al., *Histoire de Fos-sur-Mer*, Aix-en-Provence, Édisud, 1977.

Hartmann-Virnich, Andreas,"Hyères, Église Saint-Louis. Ancienne église conventuelle des Cordeliers." dans *Monuments du VAR, Congrès Archéologique de France. 160e session 2002*, Paris, Société Française d'Archéologie, et Musée des Monuments

Français, 2005.
Lassalle, Victor, *L'influence antique dans l'art roman provençal*, *Revue archéologique de Narbonnaise*, Supplément 2. Paris, Éditions E. de Boccard, 1983.
Ollivier, David, Michel Pasqualoni, Paqul Turc, Bertrand Mafart, Marianne Aubry, "Abbatia Sancti Petri de Almanarra, L'abbaye Saint-Pierre de l'Almanarre à Hyères (Var)", dans *Archéologie du Midi médiéval*, tome 22, Centre d'Archéologie Médiévale du Languedoc, Carcassonne, 2004.
Pasqualini, Michel, et Turc, Paul, "Le monastère de St-Pierre de l'Almanarre: Historique et Fouilles", dans *Bulletin de la société des amis du vieux Toulon et de sa région*, no.114, Toulon, 1992.
Pauvarel, Carole, et al., *Les ex-voto de la collégiale Saint-Paul à Hyères, Itinéraires du patrimoine*, Lyon, Éditions Lieux Dits, 2006.
Turc, Paul, *L'Église Saint-Louis d'Hyères*, Hyères, Éditions C.C.D.P., 1992.
——, *Hyères et les seigneurs de Fos, Fin Xe siècle-1257*, Toulon-Hyères, Centre Archéologique du Var, Société Hyéroise d'Histoire et d'Archéologie, Mémoire à lire, Territoire à l'écoute, 2003.
La Ville d'Hyères-les-Palmiers, ed., *Hyères Patrimoine I,* 2013.
——, *Hyères Patrimoine XII*, 2013.
柴田三千雄・樺山紘一・福井憲彦編『世界歴史大系・フランス史１』、山川出版社、1995 年。
中川久嗣・安達未菜「南フランス、ヴァール県南西部のロマネスク聖堂についてーラ・セルからイエール、シ=フールまで」、『文明』第 21 号、東海大学文明研究所、2017 年 3 月、所収。
山瀬善一「バルセローナ伯支配下のプロヴァンス都市制度の動向」『国民経済雑誌』98-6 号、1958 年、所収。

注

[1] Maurice Abbonen, et al., *Hyères les Palmiers, plus de 2000 ans d'histoire,* Hyères, Image et Mémoire de Hyérois & Centre de Culture et de Documentation provençales, 1993, pp.116-120.

[2] Victor Lassalle, *L'influence antique dans l'art roman provençal, Revue archéologique de Narbonnaise*, Supplément 2. Paris, Éditions E. de Boccard, 1983, pp.8-10.

[3] Maurice Aghulon et Noël Coule, *Histoire de la Provence*, Paris, Presses Universitaires de France, 2007, pp.23-27. ; Raoul Busquet, *Histoire de la Provence des origines à la revolution française*, Éditions Jeanne Laffitte, réimpression, 1997, pp.129-132.
中川久嗣・安達未菜「南フランス、ヴァール県南西部のロマネスク聖堂についてーラ・セルからイエール、シ=フールまで」、『文明』第 21 号、東海大学文明研究所、2017 年 3 月、所収。

[4] 柴田三千雄・樺山紘一・福井憲彦編『世界歴史大系・フランス史1』、山川出版社、1995 年、

172-174 頁。

[5] Maurice Aghulon et Noël Coule, *Histoire de la Provence*, pp.28-29. ; Édouard Baratier, ed, *Histoire de Provence*, Toulouse, Éditions Privat, 1969, pp.110-111. ; Raoul Busquet, op.cit., pp.133-135.

[6] Paul Turc, *Hyères et les seigneurs de Fos, Fin Xe siècle-1257*, Toulon-Hyères, Centre Archéologique du Var, Société Hyéroise d'Histoire et d'Archéologie, Mémoire à lire, Territoire à l'écoute, 2003, pp.31-36.

[7] Paul Turc, op.cit., pp.33-34.

[8] バルセロナ伯が南フランスに進出して以降のこの地域の政治状況、とりわけトゥールーズ伯との関係などについては、山瀬善一「バルセローナ伯支配下のプロヴァンス都市制度の動向」『国民経済雑誌』98-6 号、1958 年、所収、を参照のこと。

[9] Paul Turc, op.cit., pp.34-35, pp.56-57.pp.68-70.

[10] Hubert Gay, et al., *Histoire de Fos-sur-Mer;* Aix-en-Provence, Édisud, 1977, p.62.

[11] *Ibid.*, pp.71-75.

[12] Maurice Abbonen, et al., *Hyères les Palmiers*, pp.50-51.

[13] Paul Turc, op.cit., pp.58-61.

[14] Françoise Brien, et al.,"Hyères. Fouilles de l'église Saint-Pierre et de ses abords", dans *Archéologie du Midi médiéval*, tome 10, 1992, p.136.

[15] Paul Turc, op.cit., pp.61-62.

[16] Christian Corvisier, "Le château d'Hyères et la fortification capétienne sous le règne de Charles d'Anjou à Hyères et à Brégançon", dans *Congrès Archéologique de France, 160e Session, 2002, Monuments du Var,* Société Française d'Archéologie, Paris, 2005.

[17] Françoise Brien, et al.,op.cit., pp.135-136.

[18] Paul Turc, op.cit., p.62.

[19] Françoise Brien, et al., op.cit., pp.136-137.

[20] Charles Amic et Jacques Olivo, *Hyères au moyen âge*, Hyères, Éditions C.C.D.P., 1995, p.47.

[21] Françoise Brien, et al., op.cit., p.138.

[22] *Ibid.*, pp.140-142. ; Charles Amic et Jacques Olivo, op.cit., p.47.

[23] Charles Amic et Jacques Olivo, op.cit., p.48.

[24] Christian Corvisier et Sylvie Denante, "Hyères-Collégiale Saint-Paul", dans *Monuments du VAR, Congrès Archéologique de France. 160e session 2002*, Paris, Société Française d'Archéologie, et Musée des Monuments Français, 2005, pp.255-256. ; La Ville d'Hyères-les-Palmiers, ed. "Collégiale Saint-Paul" dans *Hyères Patrimoine I,* 2013, p.21.

[25] La Ville d'Hyères-les-Palmiers, op.cit., p.21.

[26] *Ibid.*, p.22.

[27] Christian Corvisier et Sylvie Denante, op.cit., p.258. ; Maurice Abbonen, et al., op.cit., p.121., pp.202-203.

[28] Carole Pauvarel, et al., *Les ex-voto de la collégiale Saint-Paul à Hyères, Itinéraires du patrimoine*, Lyon, Éditions Lieux Dits, 2006. ; Centre de Culture & de Documentation Provençales, *La collection Hyèroise d'ex-voto*, Hyères, Éditions C.C.D.P., 1988.

[29] Charles Amic et Jacques Olivo, op.cit., p.52.

[30] Maurice Abbonen, et al., op.cit., p.80.

[31] La Ville d'Hyères-les-Palmiers, ed, "Tour des Templiers", dans *Hyères Patrimoine I,* p.18.

[32] Paul Turc, op.cit., p.118.

[33] Andreas Hartmann-Virnich,"Hyères, Église Saint-Louis. Ancienne église conventuelle des Cordeliers." dans *Monuments du VAR, Congrès Archéologique de France. 160e session 2002*, Paris, Société Française d'Archéologie, et Musée des Monuments Français, 2005, p.149. ; Raoul Bérenguier, *Églises et abbayes du Var*, Paris, Nouvelles Éditions Latines, sans date, p.19.

[34] La Ville d'Hyères-les-Palmiers, ed.,"L'Église Saint-Louis", dans *Hyères Patrimoine I,* p.12.

[35] La Ville d'Hyères-les-Palmiers, ed., *Ibid.*, p.12., ; Paul Turc, *L'Église Saint-Louis d'Hyères*, Hyères, Éditions C.C.D.P., 1992, p.19. なお Paul Turc は、シャルル 9 世がイエールに来た年を 1589 年としているが、これは 1564 年の誤りであろう。

[36] Paul Turc, *L'Église Saint-Louis d'Hyères*, pp.22-32.

[37] *Ibid.*, p.17, p.57.

[38] *Ibid.*, p.48.

[39] Maurice Abbonen, et al., op.cit., p.201.

[40] Andreas Hartmann-Virnich, op.cit., pp.156-157.

[41] James Bromwich, *The Roman remains of southern France*, London and New York, 1993/1996, Routledge, p.267.

[42] Michel Bats, "Hyères-Site d'Olbia", dans *Congrès Archéologique de France*, *Monuments du Var*, Société des Monuments Français, Paris, 2005, p.254.

[43] Jean-Pierre Brun, *Carte Archéologique de la Gaule, 83-1, Le Var,* Académie des Inscriptions et Belles-Lettres, Paris, 1999, p.450.

[44] Michel Bats, op.cit., p.252.

[45] Paul Turc, *Hyères et les seigneurs de Fos, Fin Xe siècle -1257*, p.94.

[46] David Ollivier, et al., "Abbatia Sancti Petri de Almanarra, L'abbaye Saint-Pierre de l'Almanarre à Hyères (Var)", dans *Archéologie du Midi médiéval*, tome 22, Carcassonne, 2004, pp.4-7.

[47] Michel Pasqualini et Paul Turc, "Le monastère de St-Pierre de l'Almanarre: Historique et Fouilles", dans *Bulletin de la société des amis du vieux Toulon et de sa région*, no.114, Toulon, 1992, p.35.

[48] La Ville d'Hyères-les-Palmiers, ed., "Saint-Pierre de l'Almanarre, une abbaye de femmes", dans *Hyères Patrimoine XII,* 2013, p.17.

[49] Informations sur Place.

[50] *Ibid.*, pp.16-20. ; Informations sur Place.

[51] David Ollivier, et al., op.cit., pp.8-9.

[52] *Ibid.,* pp.8-10.

[53] *Ibid.,* p.10.

[54] La Ville d'Hyères-les-Palmiers, op.cit., p.5.